

古代建築における扉の構造と意匠

－第一次大極殿復原扉の再検証－

はじめに 柱間装置の一つ、建物の出入り口に設備される扉は、開閉方法の違いにより開戸・釣戸・引戸に分類される。このうち開戸の扉形式、それも大仏・禅宗様建築導入以前の寺院建築における扉は板扉と考えられている。現在復原が進められている平城宮第一次大極殿の設計段階では、構造から意匠、技法にいたるまで様々な検討を積み重ね、扉については全箇所、開戸・板扉形式で実施計画がまとめられた。一方、工事着工後、より詳細な設計をおこなう必要から、細部に関する調査研究をおこない、その検討結果を工事に反映させている。扉の構造、意匠に関する再検討もその一つであった。

本稿は、大極殿復原扉に関する既往の調査研究を踏まえつつ、現存古代建築のうち、当初の扉が残るものと対象としておこなった再度の調査研究に基づき、古代建築の扉形式について考察するとともに、第一次大極殿の復原扉形式を再検証するものである。

扉板の形式と意匠 表3は調査対象建築にみられた扉形式を整理したもので、当初ではない扉を持つ建築、絵巻にみられる建築も一部含む。まず板扉形式は、平等院鳳凰堂の扉のみ例外（太鼓張り板扉）で、これ以外はすべて裏棧の有無の差等を持つものである。たとえば法隆寺金堂、同五重塔はヒノキの厚板を使用した一枚板からなる扉で、彩色文様等の装飾を持たない。すなわち奈良時代初頭までの板扉は一枚板形式が多く、次第に数枚矧ぎ形式が主流となり、この場合、裏棧有りが過半を占めている（表3参照）。裏棧の有無は板厚とも関係するようで、裏棧無しでは扉規模にもよるが9cm内外と板厚が厚く、裏棧有りでは6cm強とやや薄い。この違いは、良質材や大径材の入手が時代を追うごとに困難となっていくことと無関係ではないとも思われる。

一方、扉の意匠は時代が下るにつれて装飾が豊かになる。たとえば板に連子を彫り込むものや、雨壺（噴金物、饅頭金物とも呼ばれる）を打つもの、さらには文様彩色ないしは具象的な絵が描かれるもの（唐招提寺金堂、平等院鳳凰堂）も出現する。

扉の開閉方式 扉の内開きと外開きについて、まずはそれぞれの利点を考える。内開きは扉の軸が外部に現れず、

裏棧の設置により扉の強度を増すことができるため、防犯上有利といえる。一方外開きは、雨の浸入や風による扉の煽りが生じにくく、風雨が多い日本の風土に適した構造であるばかりでなく、内開きに比べて内部空間を有効に使える利点がある。以上の点から、防犯上の機能が求められる倉庫建築や門では内開き、内部空間を利用する建築では外開きが採用されやすいと考えられる。このことは表3からもうかうことができ、校倉などの倉庫建築はすべて内開きで、平面規模が比較的小さい塔と八角円堂は例外なく外開きである。一方、中心建物である金堂やこれに準ずる仏堂では、奈良時代前期まですべて外開きであるのに対し、「信貴山縁起絵巻」尼公巻（平安時代成立）にみられる東大寺金堂（大仏殿）の扉は内開きで描かれ、新薬師寺本堂、唐招提寺金堂も内開きである。

では、奈良時代後期と比定される新薬師寺本堂、唐招提寺金堂がなぜ内開き扉であるのかをつぎに考える。

内開き扉の考察 新薬師寺本堂当初扉の板は4枚矧ぎ、唐招提寺金堂は7枚矧ぎと、他建築と比べて板数が多い点で両者は共通する。この点は前記したように、良質な大径材の確保がこの頃困難になりつつあることをうかがわせるが、实际上、十分な厚さと幅広の板の確保ができなかったことにより板数が増し裏棧を入れざるを得なくなり、結果的に内開き方式扉の採用につながったと考えられる。

一方、平安時代成立の絵画史料ではあるが、東大寺金堂の場合、当初扉が絵画表現どおり内開きであったとしても、その造営は国家事業であったわけであり、木材確保の困難さを理由にあげることははばかれる。むしろ、扉高さが約10mに及ぶ扉規模に注目すべきで、その補強の必要から裏棧付きの扉を採用し、その結果、内開きとなつたと考えるのが妥当であろう。

以上のように、東大寺金堂、新薬師寺本堂、唐招提寺金堂の場合、いずれも裏棧が必要となったため内開き方式とせざるを得なく、積極的に内開きが採用された訳ではないと考えたい。このように考えた場合、寺院の中心的建物である金堂やこれに準ずる仏堂の扉は、裏棧を用いず、外開きとすることを基本としていたということができよう。

ところで、中国及び朝鮮半島の寺院建築では内開き扉を原則としている。竹島卓一はこの点とわが国の古代建

表3 古代建築の扉の構造

建物名	建立年代	用途	開き方	扉の構造	端喰	板厚さ	裏棧	扉の時代	戸締まり方法	戸締金具時代	備考
法隆寺 金堂	飛鳥時代	仏殿	外	板扉、一枚板	埋	10.0	無	当初	櫛のクルリ、海老鋸		
法隆寺 金堂裳階	奈良時代	裳階	内	板扉、一枚板	有	10.0	無	当初			当初雨壺風食痕
法隆寺 五重塔	飛鳥時代	塔	外	板扉、一枚板	無	10.0	無	当初	クルリ		当初から定規縁があった可能性も
法隆寺 五重塔裳階	奈良時代	裳階	内	板扉、二枚板	有	10.0	無	慶長	クルリ海老鋸	元禄?	
法隆寺 東室	奈良時代	僧坊	外	板扉、二枚板	有	3.3	無	永和(1375)	?		定規縁慶長に付加。旧中門板扉を方立に転用
法隆寺 経蔵	奈良時代	収蔵庫	内	板扉、二枚板	(上)	6.2	有	当初	?		盲連子、銅製の雨壺
法隆寺 夢殿	天平11	仏殿	外	板扉、三枚板	有	9.1	無	延文、慶長	クルリ(背面)、門	クルリ文化8	海老鋸残存(時代不明)、当初雨壺、当初八双風食痕
法隆寺 伝法堂	天平18以前	仏殿	外	板扉、一枚板	無	8.5	無	当初	?		347図発見板扉切り詰められている
東大寺 法華堂	天平19	仏殿	外	板扉、七枚板	框	7.0	無	当初	アフリ止め	後補	定規縁あり(当初か?)
法隆寺 食堂	奈良時代	仏殿	外	板扉、四枚板	框	4.9	無	鎌倉前後	アフリ止め		定規縁なし
唐招提寺 経蔵	奈良時代	収蔵庫	内	板扉(復原)	無	-	有	後補	?		
東大寺 本坊経庫	奈良時代	収蔵庫	内	板扉、一枚板	無	10.0	無	当初	中方立横クルリ		定規縁、金物は中世
手向山神社 宝庫	奈良時代	収蔵庫	内	板扉、一枚板	有	12.1	無	当初	クルリ		文化に扉を表す。鍵穴、座金、雨壺、四葉、八双の痕跡
唐招提寺 宝蔵	奈良時代	収蔵庫	内	板扉(復原)	無	-	無	江戸	中方立横クルリ		扉板は東大寺本坊経庫、手向山神社宝庫に倣って復原
法隆寺 創封藏	平安前期	収蔵庫	内	板扉、四枚板	無	7.8	有	奈良時代	クルリ海老鋸		定規縁、クルリ後補、当初雨壺、当初八双金具
東大寺 金堂(大仏殿)	天平勝宝4	仏殿	内	板扉	?	?	有	当初の絵巻	?	?	両面に雨壺
榮山寺 八角堂	天平宝字7	仏殿	外	板扉、二枚板	埋	7.6	無	当初	?		当初定規縁、六瓣風食痕
新薬師寺 本堂	奈良時代	仏殿	内	板扉、四枚板	無	6.4	有	当初	今門、当初クルリ	文化	門は鎌倉初期以前から使用、当初八双金物
唐招提寺 金堂	奈良時代	仏殿	内	板扉、七枚板	無	7.3	有	当初	?		定規縁なし
室生寺 五重塔	平安初期	塔	外	板扉、二枚板	有	3.5	無	江戸・明治	横クルリ		当初木製雨壺、当初八双風食痕、外面彩色
東大寺 勸進所經庫	平安前期	収蔵庫	内	板扉、二枚板	無	10.5	有	当初か?	木製横クルリ	鎌倉以降	海老鋸、掛金具残存(鎌倉~江戸)
東大寺 法華堂經庫	平安前期	収蔵庫	内	板扉、三枚板	無	6.6	有	中世	木製横クルリ		海老鋸、掛金具残存
醍醐寺 五重塔	天暦6	塔	外	板扉、二枚板	有	5.5	無	当初	クルリ?		定規縁がいつからあるのか?
法隆寺 大講堂	正暦1	仏殿	内	板扉、三枚板	無	6.7	有	復原	正面門背面クルリ		板厚より裏棧復原。建武2年の太鼓張り扉あり
平等院 風鳳堂	天喜1	仏殿	外	太鼓張り板扉	2.1*2	太鼓	当初	アフリ止め、クルリ	当初		背面中央はクルリで戸締まり
石山寺 本堂	永長1	仏殿	外	板扉、三枚板	有	-	無				慶長より古い金具無し
淨瑠璃寺 本堂	嘉承2	仏殿	外	板扉、三枚板	有	-	無	当初	?		
中尊寺 金色堂	天治1	仏殿	外	板扉、?枚板	有	3.9	無	当初	クルリ、掛金具	亡失	
願成寺(白木) 阿弥陀堂	永暦1	仏殿	外	板扉、二枚板	有	4.5	無	?	?		両折戸あり
當麻寺 本堂	永暦2	仏殿	外	板扉、二枚板	有	6.1	無	中古(鎌倉?)	?	中古(鎌倉?)	扉、定規縁、角八双は同時期のもの

築にみられる扉形式との違いに注目している。大規模な扉を一枚板形式でつくることと扉を外開きにするわが国の古代寺院建築にみられる特徴は、大陸から伝えられた手法ではなく、日本固有のものと考えている。すなわち日本の古代における寺院造営が大陸の建築技法を鵜呑みにしたものではない証拠の一つとして、この大陸と日本の扉形式の相違点をあげている¹⁾。

大極殿正殿復原扉の形式 以上の調査研究を踏まえ、第一次大極殿の復原扉形式を再検討する。まず扉の開閉方式であるが、建物の格を考慮すれば外開きとするのが妥当と思われる。しかし、今回の大極殿復原工事の実施計画案はこれまで見てきた寺院建築とは異なる以下の特徴をもつ。

- ①二重基壇上に高欄が設えられている。
- ②絵画史料をもとに、初重正面柱間を開放としている。

①に関しては、大極殿の場合、基壇は二重基壇に復原され、上成基壇は発掘遺構で確認された基壇の範囲より当然狭小となる。さらに高欄も存在することから扉を外開きとした場合、儀式等における使用時に支障を及ぼすことが想定され、この点から内開き扉であった可能性を否定できない。ちなみに復原扉の実施計画では、この点が重視されている。②は大極殿の扉の開閉方式をより明確に指し示す設計条件といってよいであろう。すなわち、建物の四周のうち正面のみ開放とした場合、開放方向から風が建物内に侵入する。これが突風の場合、侵入

した風圧は逃げ道を持たないため、正面を除く三方に位置する扉に相当な圧力をかけるであろうことは想像に難くない。したがって大極殿の場合はむしろ内側からの風圧を考慮しなければならない。この点から、大極殿の扉が内開きであると考えることは蓋然性のあることといつて問題ないと思われる。

以上の点から、大極殿正殿の復原扉形式を内開きとして考えた実施計画は、妥当性のあるものということができる。

一方、扉の意匠に関しては、実施計画上、扉板を五枚矧ぎで設計している。この場合、事例扉から、あるいは構造上裏棧を設ける必要があることはいうまでもないが、前記要点②に関する考察からも、規模のある大極殿の扉は相当の補強処置が必要となる。したがって、扉は裏棧付きの板扉である可能性が高く、この場合、正面の裏棧対応位置に雨壺を打ちつけ莊嚴とする実施計画は妥当と考えられる。「信貴山縁起絵巻」尼公巻に描かれた東大寺金堂の扉に見られるように裏棧にも雨壺を打つべきか検討をおこなったが、上記絵巻の成立年代が平安時代であることと現存遺構で裏棧に雨壺を打つものが存在しないことから、当初の実施計画のとおり正面のみ雨壺を打つこととした。(山下秀樹／奈良県・窟寺茂・清水重敦)

注

- 1) 竹島卓一『建築技法から見た法隆寺金堂の諸問題』393頁
中央公論美術出版、1975.6。